

昭和九年七月一日第三種郵便物認可
平成十七年九月一日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第26巻第9号



俳句雑誌[おき]

9月号

沖 発行所

白一点

林 翔

重信二十三回忌

八月号の「俳句鑑賞ドリル」で、前衛俳人高柳重信がテーマになっていたのは意外でもあったが、重信は若き日の句友でもあったから、一筆認めたくなった。

私が「馬酔木」の一句級であった頃、誘われて「日月」にも参加したのは、主宰加宮貴一の家と私の家とが近く、日月句会は加宮邸で毎月開かれていたからに外ならない。

日月句会のメンバーは男性の方が多く、皆青年期又は壮年前期くらいの活気ある人々であった。中でも、私より少し遅れて入った高柳重信はまだ早大の学生であった。加宮家の玄間に置かれてあった早稲田の角帽の尖りが、まだ眼裡に残っている。

先日、稲城市在住の丸山正義という面識もない人から手紙が届いた。加宮貴一について知りたいということであったので、三階の書庫から探し出した「日月」を送ってあげた。

万 緑 の 白 一 点 が 吾 な り し

並 足 で 吾 を 追 ひ 越 せ り 夏 乙 女

旨 さ う な 夏 草 茂 り 馬 の 墓

日 焼 子 が 純 白 の 衣 を 選 び 着 る

蜥 蜴 静 止 す 胴 の 直 線 尾 の 曲 線

鐘 を 割 る 音 か 俄 か の 蝸 は

七月二十三日

地^な 震^み は 止 み 蝸 世 界 蘇 る

回想 三句

ふ り 向 け ど 彼 の 人 あ ら ず 草 い き れ

天 そ そ る 山 に 音 あ り 滝 落 つ る

鵪 の 喉 を 通 り し 鮎 を わ が 喉 へ

礼状に「今日、七月八日は奇しくも高柳重信の二十三回忌です。」とあったので、二十二年前の日記帳を取り出してみた。

七月八日・帰宅すると妻が「又俳人が死んだわよ」と言う。誰かと思ったら高柳重信の訃が夕刊に載っていた。まだ六十歳である。(下略)

七月二十三日・故高柳重信氏の告別式。南荻窪の願泉寺にて。葬儀委員長高屋愆秋、俳句評論代表和田悟朗の弔辞、それぞれ胸を打つ。喪主中村苑子の挨拶も哀切。(中略)沖からは翔・博・秀子・晴子。能村氏からは弔電。

日記は以上だが、歳月茫茫。

林 翔



勝気

能村 研三

全国文学館ガイド

八月に小学館より「全国文学館ガイド」が刊行された。全国には現在五五〇余りの文学館があり、主要文学館七五館を写真入りで紹介している。私は地方に行ったときなどは、なるべくその土地にある文学館や美術館を訪れることにしており、数えてみたらその七五館のうち二〇館に及んでいた。当然の中には東京例会の会場「俳句文学館」も含まれている。

七月にいくつかの地方支部を巡ったときにも、山形県上山にある斉藤茂吉記念館、新潟市にある会津八一記念館、松島不二夫さんの追悼句会を行った浜松文芸館、また長崎では文学館ではないが新設の県立美術館と原爆資料館などを見学した。

ところでこの秋、市川に「文学ブラザ」がオープンする。市川は古くから万葉集にも詠われ、近代になってからも多くの文化人が住み、市川を舞台にした作品が書かれている。

永井荷風は私の生まれた八幡に長く住み、ここが終焉の地になった。以前、芦屋に行った時、谷崎潤一郎記念館を訪ねた。個人の名前を被せた文学館としては施設も立派で、谷

吹き荒び青松毬も蔵王ぶり

蔵王二句

倉卒と火口湖上の岩つばめ

浅草伝法院

水鉢の酔妃蓮てふ孤高咲き

青柿の果肉はすでに種を抱き

「俳壇」九月号より七句抄出

つくづくと字画良き名を形代に

脈々と青嶺を渡る詩の系譜

師系てふ距離を見据えて喜雨亭忌

竹の根のからむ地底や土用あひ

半夏生記憶復習の校歌出て

汗衣身ぐるみ脱いで勝気なり

崎と荷風との交流が紹介されていた。その時、文豪として共に並び称される荷風を想い、いつの日か市川にも文学館が出来ないものかと思ってきた。今回オープンする「市川文学プラザ」は、「東山魁夷アートギャラリー」が「東山魁夷記念館」の開館により使わなくなったために、そこを利用することになったものである。小規模ではあるが、シナリオ作家の水木洋子さんの資料などを中心に市川ゆかりの文学者を紹介するなど、文学愛好者には楽しみな施設となるだろう。

先師登四郎についても、まだ展示スペースは定かではないが、コーナーを設けて展示・紹介してくれるそう、沖の三十五周年の年にも相応しいことと喜んでいる。

能村研三



蒼茫集



若竹 坂本京子

なくて七癖若竹のそよぎ癖
満目の青田を風のひとすべり
車窓いま雨粒すだれ遠青嶺
学問所の小さき机涼しかり
やはらかく影のちらばり今年竹
袋掛け桃の自閉のはじめとも

祭 笛 松本圭司

遠といふうつくしき距離祭笛
海開き幣の白さが風を呼ぶ
柘榴咲き空の青さの極まれり
夏蝶の視野より去りし広野かな
暮れ惑ふ空に「夏至だ」と気付きけり
螢火の消えゆく闇の深さかな

爆心地 荒井千佐代

船波が川さかのぼる雨燕
浮棧橋ぐらりと揺るる白地かな
病室の昼餉の見ゆる海紅豆
爆心地の深き緑蔭児を放つ
弾き了へて窓を開けば合歡の雨
朝凧の水尾が水尾切る帰郷なり

マスクメロン 鈴木良戈

形代のすぐに流れにのりにけり
日あたりて今朝の色なる青揚羽
万緑の嶺を裂きたる修羅落し
あめんぼう神と遊びてをりしかな
梅雨深くひたすら黙の患者椅子
軽やかにマスクメロンの打診音

潮鳴集

水の羽二重

奥入瀬

楠原幹子

岩越ゆる水の羽二重涼しかり
山脈は夕霧ぼかしお花畑
緑蔭の木椅子ひとりになるところ
恋といふ言葉もはるか螢舞ふ
薔薇剪つて指ににじむ血ばらの色

雨後の香

高橋ちよ

踏みしめて雨後の香立たす竹落葉
山風の匂ふ日和やすひかづら
夕風のうねりとなりし夏の萩
水中花に懐きし泡の光りをり
夕闇の匂ふ浴衣で訪はれけり

青茅の輪

柴田近江

真つ新たな甚平手足おもはゆき
人の世の風向き読めぬ墓

梅雨じめる三井晩鐘の撞木綱

筆塚へ朝の湿りの四龍坂

浄め塩ほどの雨過ぐ青茅の輪

ふくらみ

八百山和子

胸中に帆のふくらみや青田道
ポケットの数だけ夏の雲ちぎる
畑裏で僧と出会ひぬ花オクラ
鮎食べて標本のごと骨残す
着信をマナーモードに月涼し

夜の電話

徳植よう子

父の日の元気かとだけ夜の電話
美しきこと時に残酷花氷
鈴虫のもぢやらもぢやらと生れけり
ひまはりや指一本で弾くピアノ
ベーコンの縮みて朝の金魚草



沖作品



新潟 長谷川 春

身にのこる吊橋の揺れ山笑ふ
落ちてゆく眠りの中の青葉木菟
羽抜鶏帰山の僧につきまとひ
学僧がその名を問へり竜の玉
早苗饗や欠けてはならぬ顔ばかり
父の日の一灯揚げて船出せり

東京 坂 ようこ

竹皮をぬぐ宿坊の朝の音
父さんが好きで草矢を向けにけり
神馬にも馬臭ありけり合歓月夜
止り木の足の無防備花氷
少年の嘘育ちゆく麦の秋
スポンジにグラスの泣ける青葉の夜
百合咲いて星の運行確かなり
けふ夏至の秤かすかな狂ひあり
紐引いて大夕焼を裏返す
夜は脈打ち花アカシアの房匂ふ

東京 中尾 公彦

千葉 林 昭太郎

能村研三選

水を脱ぎ噴水空に飛沫せり
毛虫はふ禍々しくも美形なり
ピアガーデンそろそろ星に明け渡す
ほうたるを汲み取らむかに七つ星
父の日やつかへて開かぬ道具箱
和筆筒の奥より母のサングラス

菊地 光子

出目金を大きく育て眼鏡店
ページ繰る音の乾きや夏期講習
海鳴りの遙かに聞こゆ花蜜柑
青あらし浚渫船を押すことも
五月雨やラジオネームを思案中
日めくりの釘の傾きを正し夏至
辞表持つ日のまひまひの勢ひかな
もう一つ空振りできる雲の峰
夏はじめ新書にひそむ正誤表
碇錆び茅花流しの漁師小屋

高木 嘉久

工藤 進

レノン聴く梅雨の雫はしづく追ひ
 螢火に呼吸合はせをる無音界
 梅雨籠り机上の広辞苑が楯
 雨乞のやうにも津軽三味線は
 浮きあがる生命海月は泪いる
 鱧の皮刻むマイセン有田焼
 ちちの眼で涼み浄瑠璃江戸手拭ひ
 足にまだ山路のほてり明易し
 遠郭公聴く倒木を椅子として
 青芝に手をつき野外音楽会
 夏至の夜やさてこれよりのミステリー
 江ノ電のごとくとんと茅花流しかな
 羽化のごと手足の伸びる更衣
 鬱ごころ隠したき日のサンゲラス
 聖鐘の空切り結ぶ夏つばめ
 水輪の鶏ひかり脱ぎけり梅雨晴間
 水打つて敷石に灯のとびこみぬ
 脱ぎたての風生ぬるき蛇の衣
 地球水をこぼさず自転金魚玉
 石庭の波は木洩れ日若葉風
 手掴みにできる夏星山泊り
 包帯の汚れてゐたる甚平の子
 流されても守る縄張りあめんぼう
 夕焼に今生の髪染まるなり
 麦笛を吹いて父への挽歌とす

大阪

望月木綿子

市川市

栗原 公子

愛知

三好 智子

千葉

安藤しおん

東京

石川 笙児

埼玉

服部 早苗

われ宛の落し文かと裏返す
 七月やプラネタリウムの星に線
 削り立ての鉛筆の香や雷走る
 さつと掬ふは森の木洩れ日捕虫網
 胎動の記憶古りけり鮎放つ
 若鮎の水の匂に焼かれをり
 チェリー酒の泡の音色や星祭
 臍の緒の小箱見つけし梅雨の月
 金魚玉に水の死角のある不安
 仕切り直すレモンスカッシュ飲み干して

茨城

内山 花葉

東京

小嶋 洋子

新人賞予選句（九月）

早苗饗や欠けてはならぬ顔ばかり
 止り木の足の無防備花氷
 百合咲いて星の運行確かなり
 水を脱ぎ噴水空に飛沫せり
 父の日やつかへて開かぬ道具箱
 辞表持つ日のまひまひの勢ひかな
 レノン聴く梅雨の雫はしづく追ひ
 雨迄のやうにも津軽三味線は
 青芝に手をつき野外音楽会
 羽化のごと手足の伸びる更衣

長谷川 春
 坂 ようこ
 林 昭太郎
 中尾 公彦
 菊地 光子
 高木 嘉久
 工藤 進
 望月木綿子
 栗原 公子
 三好 智子

沖作品 選後句評

*
能村研三

早苗饗や欠けてはならぬ顔ばかり 長谷川 春

長谷川春さんは、古くから新潟支部に所属され中央例会や東京句会にも通信で句を送って来られる熱心な方。先日、新津で行われた句会にも、福島県に近い津川という所から駆けつけてくれた。掲句、早苗饗は、田植の作業を地域共同で行った時、その慰労も兼ねて、またその年の豊作を祈願して祝宴を行う風習だが、田植も機械化される昨今は余り見られぬものとなった。民俗学的に言つと、「さ」は田の神をさし、田植が終わった後、田の神を送る行事であった。年々高齢化が進む中、毎年行われる早苗饗で顔を合わす人々、だれもが来年の再会を祈る気持であった。この句、実際は早苗饗の句として鑑賞したが、新潟の支部に久しぶりで参加した春さんの素直な挨拶の気持であったようにも思えた。

止り木の足の無防備花氷 坂 よしこ

止り木はバーなどのカウンターの前に置く脚の高い腰掛であるが、最近ではバーに限らず、簡単に飲めるスタンドカフェなどでもよく見受けられる。少し足が短かったりすると、床に足がつかず不安定になる。体全体を椅子で支えてくれるので、ある意味ではリラックスできることもあるが、やはり日本人の生活習慣にはまだ馴染まないものがある。床に足がついていないことをここでは無防備と表現したのもそんな気持からであるのだろう。季語として据えた「花氷」も、バーの片隅に装飾を兼ねて置かれたもので一瞬の爽涼さを感じさせてくれた。

百合咲いて星の運行確かなり 林 昭太郎

百合は強烈な色彩の夏の花の中では、珍しく清楚な感じの花であるが、特に山百合などは大輪の花をつけ匂いも嗜せるように強く存在感のある花だ。咲きたての朝が最も美しいが、夕闇が迫り、白い百合の花は香気を放ちながら次第に闇に包まれてゆく。太陽が沈んだ天空には星が輝き、時が経つにつれその場所を静かに移す。巡る星々の運行によって季節が生じ、それによって動物や植物が育つことも操っているかのようである。昔から人々は星の運行によって地上の生き物の運命を司る力があると信じられていた。

水を脱ぎ噴水空に飛沫せり 中尾 公彦

噴水は古今の俳句でいろいろな形で詠まれて、ある意味で詠み尽くされた感もある。しかし、上五の「水を脱ぎ」という措辞は噴水を捉えた句の中で見たことがなかった。噴水をよく見て観察をしなければ生まれない句かも知れない。噴水の一条の水の束はひたすら登りつめ、その頂で初めて水を脱ぎ飛沫を放つのである。長谷川耀の句で「噴水の頂の水落ちてこず」の句を思い出した。(以下略)